

「杖を曳く」考

「奥の細道」「雲巖寺」探訪の創意―

黄 佳慧

一 はじめに

芭蕉と漢籍との関係については、是まで様々に考察されてきた。そしてその結果、ほぼ定説化していることは、実際に芭蕉が用いた漢詩句は入門書・俗本に引用されているもので、特別の研究や考究を経たものではないとされている。たとえば、田中善信氏の『芭蕉二つの顔―俗人と俳聖と』(一〇〇頁とある)が該当する文章はない。また引用文には明らかな引用の誤りがある)において、以下の通りに先行研究を要約している。

「廣田氏は「芭蕉は」(中略)専門家的漢籍、まず読んだことが無かったように考えられる。しかし、彼は(中略)漢詩における本質的生命的なものを取りあげ、これを彼の文学の内容に再創造した」と述べておられるが、入門書・俗本を利用して、

優れた作品を生み出したことに、我々は芭蕉の天才を見るべきであろう。」

随って、芭蕉は漢文を理解する能力をとにかく、彼が漢詩における素養を疑うことができない。そこで、唐代を限らず更に宋代まで探索の幅を広げて、芭蕉は何処まで漢詩を深めていたのか、今回芭蕉の集大成である『奥の細道』における「雲巖寺」の章段を通して、明確させたいと考える。

二 文の背景及び問題の所在

「雲巖寺」の描写については、「仏頂和尚の庵に対する憧れ」から出発し、「山の景色」を賛嘆しながら、最後に「禅意を込

めた場所——山居の跡」に至ったという三部分によって構成されている。

雲巖寺における「其跡みんと雲岸寺に杖を曳ば人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど打さはぎて、おぼえず彼麓に到る」と、「杖を曳ば」という表現は、主人公の僅かな行為であるが、その行い自体がなぜ「已然形」で書き表わされたのか。これまでの注釈を遡ると、宋代の蘇軾の漢詩文——「白水山を遊ぶ」を取り上げて芭蕉の動きを解釈しようとしているが、実際のところ、以下の点が曖昧である。

① 蘇軾の漢詩文によって、芭蕉の行為を説明することができただろうか？

② 何故他の文人の「杖を曳く」という表現では、芭蕉の行為の説明にならないのだろうか？

③ 「杖を曳く」という表現により、芭蕉はどのような心境を表そうとしたのだろうか？

そこで、蘇軾の漢詩全文を通して、芭蕉の「杖を曳ば」という行動の背後にある心理を考察すると共に、芭蕉が漢詩文における象徴物である「杖を曳く」の含意を、如何に利用したのかも明白にする必要がある。

三 中国文学における「杖を曳く」事の意味

「杖を曳ば」という意味が、以下の古註に示されるように、漢詩や漢文により解義されてきたことは実に興味深い。

（以下「注釈本」の略称はすべて「添付資料——」を参照。）

〔鈔〕 禮記、檀弓篇、孔子蚤作、扞手曳杖、消搖於門。（頭注

「遊白水山 東坡。曳杖不知巖谷深、穿雲但覺衣裘重。」）

和歌に、つくからに千とせの坂もなどよみて扶けらるゝ心坎

〔可常〕 遊白水山、曳杖不知巖谷深、穿雲但覺衣裘重 東坡

古今 ちはやふる神やきりけんつくからにちとせの坂もこしぬべらなり 遍昭

〔解〕 携杖、同事也。王勃詩：閒情兼默語、携杖赴岩泉。此ころ成るべし。

〔五視〕 遊白水山、曳杖不知巖谷深、穿雲但覺フ衣裘ノ重コト

東坡

和哥へ、つくからに千とせの坂もなどよみて扶けらる心か。

そもそも「杖を曳」くという表現は、蘇軾のみが使用したものではない。それにもかかわらず「解」以外の各古註はなぜ蘇軾の詩のみを採用しているのだろうか。また、蘇軾の「杖を曳」くという表現は芭蕉の文章の注釈として適切であるかどうか、改めて検討しなければならない。

まず、これまで「杖を曳」くという言葉は中国でどのように用いられてきたのだろうか。古註の「鈔」で示されている通り

に、最初に「杖を曳」くという表現が出て来たのは、「禮記、檀弓篇、孔子蚤作、扃手曳杖、消搖於門。」からである。ここで「杖を曳」くことは「逍遙」という言葉と呼応している表現である。それは中国文学において一番源創的な意味であった。そして、同時に孔子がその後次のように歌ったのである。

「歌曰：『泰山其頽乎！梁木其壞乎！哲人其萎乎！』……蓋寢疾七日而沒。『禮記・檀弓篇』」（歌曰く：『泰山が崩れてだめになり、梁の木も壊れ、哲人も萎れるよ！』……蓋し病で臥せり七日にて死亡した）

そのため、後世の人々は「杖を曳」くから隠遁した孔子のような「哲人」か「隱者」を連想しながら、それを「貧に安んじ、隠逸する」という生活態度として認識してきた。

「歴史文化名人執杖的形象主要是老子和孔子。較早見於石槨墓的孔子見老子圖像(中略)孔子卻手扶一柄“弓”形曲杖。」^三

(歴史文化人における杖を取る象徴の主となるのは老子と孔子である。最初に見られたのは、石槨墓における孔子が老子に会う図絵である。(中略)孔子が弓のように曲がつた杖を取っている。)

上記にて述べた通りに、孔子が曳いている杖は曲がつている杖であるため、「錫杖」^三により巡礼したと言われている芭蕉の典拠とは言い難いのだが、孔子の「杖を曳」く行為が歴史における最初のイメージを示したことは確かである。

「杖を曳」く表現について、「添付資料——」から分るように、唐代までの詩は僅か三首しか見られないが、宋代になると、北宋の蘇軾(六首)を初め、南宋の陸游(三十六首)など、併せて約八十二首に用いられた。他にも杖に関する表現が宋代にな

ってから圧倒的に多く詩文に取り入れられた。宋代において、散策して、杖を曳くこと、「閑適に歩く」という表現が非常に多いという事実も分かった。「閑適」とは、従来「閑居して心静かに楽しむ」(『大漢和辞典 卷十一』)^三、「静かに楽しむこと。静かに心を安ずること」(『小学館 日本国語大辞典 第二版 第三卷』)^三という意味として知られている。

このように、閑適に杖を用いる表現が何故宋代になってから多くなつたという点、沈金浩氏は次のように述べる。

「他們(宋人)的審美觀比起唐人來，也就明顯地少了金玉氣，而明顯地偏好蔬筍氣。盛唐人寫喝酒要寫金樽、玉盤、葡萄美酒夜光杯，而宋人不太願意寫這些華麗的東西。」^三

(宋代の人の審美觀は唐代の人と比べると、金や玉石の感覚が明らかになくなり、野菜や竹の子のような田野の雰囲気、好む傾向が明白に見える。盛唐の人が飲酒を書く際は、金樽、玉の皿、ぶどう酒、「夜光の杯」(名玉で造つた夜中に光を放つ

酒杯)を描こうとしているが、宋代の人はそのように華麗なものを描くことをあまり好まないのである)

宋代の人は田野の雰囲気を好んだため、樹木により作られた杖を曳くことをしばしば詩に詠んだのである。宋代を代表する文人である蘇軾が用いた「杖を曳」く表現の注釈は、宋代における「杖を曳」く意味と結びいていと考えられるのである。

四 蘇軾の「杖を曳」く事の意味

ここで蘇軾が用いる「杖を曳」くという表現が如何なるものであるか、古註に書き留められている漢詩を初め、他の詩作も取り上げるにより、また杖の種類により宋代における代表的な態度やスタイルを推定することが出来ると思われる。今回の注に取り上げられた漢詩文における蘇軾の「杖を曳」く表現については、その詩文の前後から意味を察することができる。

「因隨化人履巨跡 因つて、化人に随つて巨跡を履み得與仙兄躡飛鞚。仙兄と飛鞚を躡むを得たり

曳杖不知巖谷深、杖を曳いて 知らず巖谷の深さを、穿雲但覺衣裳重。雲を穿つて 但だ覺ゆ衣裳の重さを坐看驚鳥救霜葉、坐に看る、驚鳥の霜葉を救ふを知有老蛟蟠石甕。知る、老蛟の石甕に蟠するあるを」

(蘇軾「同正輔表兄遊白水山」)(従兄弟の正輔と一緒に白水山を遊ぶ)^三

即ち、蘇軾が杖を携えながら、仙人の案内に従つて気軽に進んでいる気分が明らかになっている。蘇軾は北宋において最も「杖を曳」くという表現を用いた詩人であった。彼が普段用いた「杖を曳」くという表現にどのような意味が含まれているか、以下のように一瞥したい。

「莫嫌犖确坡頭路、自愛鏗然曳杖聲。」

（卒确たる坡頭の險路を嫌はないのは、杖を曳く時の鏗然とする声を愛するが為である。）^三

ここで、貧乏な生活を嫌がらない理由は、金石の触れ合うような杖を曳く声を愛するからだと述べる。杖が声を発するような閑適の気分が綴られているのである。ここから、彼の生活に対する態度が見えてくる。

「江邊曳杖桃榔、瘦林下尋苗蕚撥香」

（「桃榔杖寄張文潛一首、時初聞黃魯直遷黔南、范淳父九疑也」）

（やがて、君に贈る積りの細い桃榔の杖を曳いて、江邊に出かけると、林下に植えた蕚撥の苗は香ばしい。）^四

また、上記の詩があるが、これは蘇軾の次に黃州に左遷された張文潛に贈る桃榔杖（海南島の特産）を曳き、一人で出かけ、

政治を批判しながら思案を回らしていた時の一首である。それでは、宋代の人々にとって「杖」とはいかなるものであったのであろうか。沈金浩氏は次のように指摘する。

「宋人之好用杖，好寫杖，“筇杖”一詞符號化到能代指一種生活方式，即顯示了（或者是在標榜）他們愛閑適、愛野逸的人生態度。（略）在材質上基本上都偏愛來自山野自然的植物，主要是竹、藤、藜及其它些有地方特色和野趣的材料」。

（宋代の人は杖を用い、杖を書くことを好む。「竹杖」という詞が符號化され、一種の生活スタイルの代わりとして表現されている。即ち、閑適・放逸を愛する人生の態度を明白に示している、もしくは標榜しているのである。（略）杖の材質については基本的には山野産の自然植物、主に竹、藤、藜及び地方の特色と野趣がある材料が使われる。）

従つて、蘇軾が海南島の特産である「桄榔杖」を曳き、またそれを贈り物にするという趣を理解することができる。杖の使用方法にも様々あるけれども、「曳く」ということについて同じく沈氏は以下のように説明している。

「“曳”也就是拖，突出隨便、散漫，在力度上也傾向於表現弱」²¹

（「曳く」は「引きずる」ことであり、適當さと散漫さとを際立たせ、力度も弱い傾向がある。）

そして「曳」は「扶」（支える）の次に、二番目に多く用いられる杖の使い方であると同氏が述べていた。よつて、「杖を曳く」という表現が「氣輕に歩く」という含みを持つていることが分かる。また、「杖」そのものが脱俗、閑適、逍遙の生活方式を表す道具と宋代において一般的に認識されている。即ち、宋代における「杖を曳く」ことは、唐代と同様に出かけて自然の中

を歩く状況として描かれているが、唐代とは異なり、その主人公が用いた杖の種類によりそのスタイルが伝えられている。特に旅に生きてきた蘇軾は「犖确たる坡頭の險路を嫌はないのは、杖を曳くときの鏗然とする声を愛するが為である」²²。という詩文から分るように、その「閑人の氣分」をはつきりと表現しきつた有名な文人であり、杖を曳くときの「声」が生きているように聞こえていることが分かる。

即ち杖を曳くことで閑適に伴ううきうきした氣分が示され、それによつて普段感じ取ることが出来ないそのものの質感に触れることを表現したのである。芭蕉は蘇軾の生き方を好んだと知られており、蘇軾の「杖を曳く」ことを念頭に置いてその表現を生かした可能性があると考えられる。

五 芭蕉の「杖を曳く」事の意味

古註はこの漢詩文を踏まえ、芭蕉の「杖を曳ば」という言葉解釈するが、それは正確に「杖を曳く」ことの説明になった

だろうか。従来の主な評釈書を調べてみると、「杖を曳ひば」という言葉は以下のように釈義されている。

〔講読〕 杖を手にして歩くこと

〔詳考〕 〔綜合・樋口〕『禮記』檀弓上に、孔子蚤作、負手曳杖、消搖於門、歌曰、云々。是等から漫歩乃至逍遙するに主としていふ。急用などで疾行するには言はぬやうである。

〔評釈〕 出かけると。「杖を曳ひくは名所などを訪れること。『隨行日記』に、四月「五日、雲岩寺見物。朝曇。兩日共二天氣吉」と見えるときの体験による。

上記から分かるように、「杖を曳ひば」という言葉は①単に杖を持つて歩くこと、②逍遙に出かけること、③名所を訪れること、と訳されている。

〔詳考〕では漢文を引用し、主人公の心境を「そぞろあるき」と漢文と同じ意味として読み取ったが、それ以上ではない。〔評

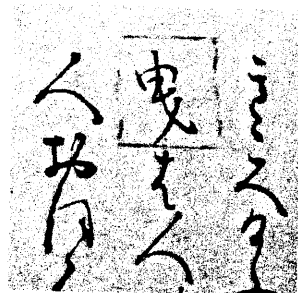
釈〕は「名所」などを訪れること

まで解釈を進めた。だが、芭蕉自筆の『奥の細道』[※]において、

下の写真で示したように、「杖を曳ひば」の「曳ひく」という部分には張り紙の跡が残されている。

芭蕉は常に丁寧な推敲してか

ら創作しているので、「引」に貼紙して「杖」[※]ということから、芭蕉が意図的に変えたと推測できる。その上、差し当たり芭蕉以前の日本文学では、「杖を曳ひく」という表現が現在の時点でもまだ見つかからないことから、芭蕉は「杖を曳ひく」表現を「閑適の気分」の意味として大量に用いた宋代に影響された可能性が高い。そうであれば、中国文学において「杖を曳ひく」ことが名所を訪れる意味として用いられていないため、芭蕉が「仏頂和尚の跡」に行く心境に再び思索をめぐらす必要がある。



六 「杖を曳」における含意転換

芭蕉は「洪笠ノ銘」においても蘇軾は西行と同じく旅人であり、芭蕉が求めている旅人の姿でもあったと呈示した。

「西行法師のふじ見笠か、東坡居士の雪見笠か。宮城野の露に
供つれぬバ、呉天の雪に杖をやひかむ。霰にさそひ、時雨にか
たむけ、そぞろにめでゝ殊に興ず。」

「杖を曳」くことは異なる箇所で行われているが、この「洪笠ノ銘」では、「漫ろに歩く」という意味で理解できる。芭蕉は雪が降ることに喜び、杖により雪地へ楽しく出かけようとする様子を描いたのであった。「洪笠ノ銘」の場合は、蘇軾の漢詩文における「杖を曳」くという意味が全く同じであるため、蘇軾の詩が典拠であると考えられる。だが、今回の雲巖寺における「杖を曳」く行為は、古学者によって孔子もしくは蘇軾が描く様子と対照されてきたが、それだけで今回の「杖を曳」くという表

現の意味を充分に示していないことは明白である。

従来の「杖を曳」に対する解釈は「逍遙に出かけると」という「順接」・「孔子の行為」として理解されていたが、実際は孔子の漫步という意味に留まらず、宋代の「杖を曳」くという表現の意味も含まれていると考えられる。宋代における「杖を曳」くという表現が、原義の「杖を引きずる」ことから脱出し、その放逸、閑適という心的な状態を暗喩していることは既に示した通りである。

注釈において蘇軾の詩が取り上げられたように、まさに宋代における「杖を曳」くという心的なニュアンスを活かした表現であると注釈者が解釈したことが分る。従って、「杖を曳」くことに關して、芭蕉が中国文学において見たこともない、「ば」という已然形を取り組んだことで、芭蕉の心境が隠されている部分を確かに目にすることができるといえる。即ち、蘇軾がよく表現した閑適な「気分」と「杖を曳く声」を踏まえることにより杖並びに旅人らしい質感を表現している。更に「已然形」によって、

その閑適な「気分」が一気に若者の陽気さに紛れ込んでしまうという、滑稽に富んだ面白みを含意する転換に成功している。

田中善信、『芭蕉の二つの顔―俗人と俳聖と』、講談社、二〇〇八年、五八頁
張從軍、『楊杖與漢代敬老習俗』、『民族研究』二〇〇五・01期

三、「僧はからすのこくなる墨のころも」、三衣の袋をえりにうかけ、出山の尊像をつしにあがめ入テうしろに背負、拄丈ひきならして、無門の閑もさほるものなく、あめつちに独歩していでぬ。」『かしま紀行』において、「拄丈」とは「旅の僧侶や修行僧が持つ杖である錫杖のこと」と説明されているため、芭蕉の普段に曳いた杖は「錫杖である蓋然性が高い。」(芭蕉DB) :

<http://www.eee.yamanashi.ac.jp/~fioyo/basho/kashimamoude/zenbun.htm> 一九九七年より)

諸橋轍次、『大漢和辞典 卷十一』昭和三十四年、大修館書店、七二六頁
日本・語大辞典第二版編集委員会、『日本国語大辞典 第二版 第三卷』一九七二年、小学館、一三四九頁

沈金浩、『一枝藤杖平生事―宋代文人的杖及其文化蘊涵』、『中國社會科學』二〇〇七年第一期第157頁

国民文刊行會、『續譯漢文大成 文學部 第十七卷上巻』、康文社 一九三二年六〇一頁
国民文刊行會、『續譯漢文大成 文學部 第十五巻』、康文社 一九三〇年 五四〇頁

国民文刊行會、『續譯漢文大成 文學部 第十七巻上巻』、康文社 一九三二年六二四頁

沈金浩、『一枝藤杖平生事―宋代文人的杖及其文化蘊涵』、『中國社會科學』二〇〇七年第一期第157頁

沈金浩、『一枝藤杖平生事―宋代文人的杖及其文化蘊涵』、『中國社會科學』二〇〇七年第一期第157頁

国民文刊行會、『續譯漢文大成 文學部 第十五巻』、康文社 一九三〇年 五四〇頁

上野洋三・櫻井武次郎、『芭蕉自筆 奥の細道』、岩波書店 一九九七年

上野洋三・櫻井武次郎、『芭蕉自筆 奥の細道』、岩波書店 一九九七年 八十頁

本研究の過程において、本研究の過程において、終始懇切なる御指導と御鞭撻を賜り、親身な御助言と力強い励ましを頂いた、三重大大学の濱 森太郎教授に深くご感謝を申し上げます。また、本研究における議論・検討に当たって、ご教示ならびに御激励を賜りました同大学の酒井 恵子先生、社会人院生の鈴木 重雄様、板倉 啓太郎様、同研究科の畑 裕子さんをはじめ、同研究室の上野 貴之さん、米川 梨香さん、俳人の山田征司様に心より御礼申し上げます。

【こう かけい 神戸大学大学院文学研究科博士課程在学】